

いたずら

ESSAY

倉元 信行

8

借金清算

父の入院もあって商売から足を洗った私の家は、国道3号線に面した駅向かいの南側を時計屋とラーメン屋に貸していた。

事故が起きたのは時計屋の方である。

昭和37年、未だ少し正月気分の残っている1月18日の宵の口、少しもうろくしかけの店の主人がストーブを足に引っかけ倒してしまった。

すぐに隣の店の人を呼べばこんな大火事にはならなかったと思われるが、こぼれた油に回った火を自分で消そうとあわてたらしい。隣が気づいた時は手のつけ様のない状態だった。

「火事だ、逃げろ」

叫び声が二階の北の隅にあった私の部屋に届いた時には、もう階段に薄い煙が漂い始めていた。

あわてて窓を開け川沿いの裏道に投げ下ろすことができたのは教科書だけ。私は階段を駆け降りた。

それからあつという間だった。降りきる冬の冷たい雨をものともせず火はすさまじい勢いで家を包み込んでいた。

小さな川をはさんだ裏の路地から、火の粉を浴びながら呆然と闇に浮かぶ我が家を見上げる父と母の姿が目には焼き付いている。

炎の紅い色を映した母の顔には、決して雨ではない流れるものがあった。

道に散らばった私の教科書も、びっしょりと

濡れて無残に打ちひしがれていた。

国道を全面通行止めにし、十数世帯を焼き尽くしたこの火事は、幸い夜の早い時刻だったため死者やけが人を出さずに済んだのだが、その後の私の進路には大きな影響を及ぼすことになる。

保険の話になると、私は火災保険だけはきちんと入っておかなければと言う。

この火事で支払われた保険金と、焼失した家の跡地を隣の銀行に売ることによって、すべての借金は清算された。

お金が無いのでもう保険は打ち切ろうと言っていたのに、とは、後の父と母の言葉である。

